Meisei University

闇の中への照射

――モーム『コスモポリタンズ』の手法について――

和田正美*

一　モームの創作態度

イギリスの小説家サマセット・モーム（一八七四―一九六五）が一九三六年に出版した'Cosmopolitans'はその序文によれば、the Cosmopolitain Magazineの編輯者の需めに應じて同誌に寄せた短篇小説二十九篇を一冊にまとめたものであり、長篇小説を幾つかものしたモームにとつてこれはどちらかと言へば餘技に屬する作品群であつたらうと思はれるが、それでもこの玉石混淆の短篇集を分析することから私達の前には一つの光景が浮び上つて來ると思ふ。早速その分析に着手すると、第一に、おそらく作者その人なのであらうと感じられる一人稱の語り手がどの小説にも登場してゐる。その限りにおいてモームの短篇は日本の私小説に似てゐると言へなくもないが、それは見かけだけのことであり、彼我の小説において力點の置き方は明らかに異なる。私小説の場合には、語り手がすなはち作者であることは誰も怪しまない、不動の前提とされ、しかもその作者の思想、感情、行動の類がことさら重要視されるのに對して、モームの小説では、語り手と作者が何處まで一致するのか實はよくわからず、作者が乗出して自分の主張を聲高に語つてゐる時にも――モームの小説にはそれが多いのだが――それは作者自身のためではなく、展開されようとしてゐる狀況のためなのである。作者がその小説のやうな經驗を實際にしたのかどうか穿鑿しようとする氣を讀者は起さない。語り手が語り出す人物にしても、作者がその人物に本當に出會つたといふ保證はなささうに見えるが、このことについてはモーム自身、次のやうに述べてゐる。

> 物語作者であれば、どういふ風變りな人に出會つても、その人を手掛りにして物語を作ることが出來る。(1)

結局、モームはこの廣い世界で知る機會を得た他人の、ことによると些細な奇癖や何等かの特徴を一應の材料にして、作者の想像力よりする修正を多かれ少なかれ加へられた人物を描いて見せたのであらう。一先づさういふことにしておいて、分析の筆を先に進めることにしたい。

第二の事柄は右に述べた第一の最後の部分にかかはつて來るが、モームはそのどんな作品の中でも、人間の生態に寄せる、溢れんがばかりに旺盛な興味關心の外へ一歩も踏み出してゐない。彼は『コスモポリタンズ』所收の短篇を書くに際して、「人間を。何よりも人間を」と念じてゐたやうに思做される。『異郷の地にて』(In a Strange Land) の書出しは次の如くである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

私は放浪性の人間であるが、旅をするのは、立派な記念物を見るためではない。實際、さういふものはいささか退屈である。また美しい風景にもすぐ飽きてしまふ。私の旅は人間を見るために行ふのである。[2]

これは作者の生の聲と考へてよいだらう。或はこの箇所では作者と語り手が一致してゐるのだと考へることも出來る。

そして第三に語り手の役割といふ問題がある。先に私は作者が――ここでも作者と語り手は一致してゐる――何かを主張するのは自分のためではなく狀況のためなのだと述べたが、その狀況とは、語られつつある人物のことに他ならない。そこに立派な記念物や美しい風景があつたとしても、それはその人物を引立てるものでしかない。私達にとつて未知の人は、私達がためには、闇の中を動いてゐるのだといふ比喩を持出せば、語り手は、それまで闇の中にゐた他人にしばらく光を當てて、彼の言動を仔細に觀察し、もはやその必要はないと判斷したところで、彼を闇の中へ戻してやるのであると言へよう。

同じことを違つた言ひ方で表せば語り手は觸媒のやうなものである。その觸媒に誘ひ出されて特異な人物が姿を現し、自らをその特異性によつて讀者に印象づけるのだ。

私なりの分析の結果を最後にもう一つ記すと、モームが觸媒たる語り手を通して闇の中から選び取り、暫時の光を當てる人々は、人間の暗面とは言はないまでも何等かの否定的な姿を象つてゐる場合が多いやうである。彼等は思ひがけない不德に走つたり、そのいやみな言動で語り手をたつぷり苦しめたりする。このことの裏に作者獨自の人間觀が潛んでゐるであらうことは容易に察知出來るが、『危急の際の友』(A Friend In Need) の中には、またしても作者が乘出した次のやうな一節が見える。

小説と戯曲が人生の眞に何故至らないのかといふと、それは作者が、おそらく必要に迫られて、登場人物を首尾一貫した人間にしてしまふからである。彼等を自己矛盾の存在にすると、理解し難い人間になるので、さうすることは出來ないのだが、しかしながら、自己矛盾こそ私達の姿ではないのか。私達は偶然寄せ集められた、互ひに反撥し合ふ幾つかの特質の束として生きてゐる。[3]

これだけ取上げると幾分單純な議論にも思へるが、ともかくモームは右のやうな人間觀を背景にして、多種多樣な、それぞれのやり方で私達の興味を惹く人物を描き出した。が、面白いのは、かかる人間矛盾論が必ずしも當嵌められない作品も『コスモポリタンズ』の中には含まれてゐることである。モームは肯定的な人物も少しは描いてゐるが、否定から肯定へ人間像が移つて行くにつれ、人間の自己矛盾といふ理論は力をなくすやうに見える。

これから三つの短篇について略述するが、どれも日本ではあまり知られてゐない作品のやうな氣がする。

二　『物知り博士』(Mr. Know-All)

この小説は、「私はマックス・ケラダと知合ふ前からでさへ、この人を嫌ふ氣持になつてゐた」(I was prepared to dislike Max Kelada

NII-Electronic Library Service

Meisei University

even before I knew him.）といふ奇妙な一文で始まつてゐる。語り手は戰爭（一次大戰）が終つて旅行の自由を取戻したので、サンフランシスコから横濱に向ふことにしたが、二人部屋の相客の名が右記のマックス・ケラダであることを知つて氣が沈んだ。二週間の長旅をスミスやブラウンと共にすることですら氣詰まりであらうに、ケラダといふ非アングロサクソン的な苗字の男と一緒では、船室の窓を開けさせてもらふことさへ出來ないだらうと感じたのである。

やがて語り手の前に、すなはち、讀者の前に颯爽として出て來たケラダ氏は、案の定、大變な人物だつた。イギリス國籍のレヴァント人らしいケラダ氏は語り手の意向を一切無視して、彼の一擧手一投足を拘束し、そればかりか、船内のあらゆることに口を出し、おしやべりで、己惚れが強く、自分は何でも知つてゐるといふ態度を執り、どんな場合にも自說を固守して讓らない。船客達から嫌はれに嫌はれたケラダ氏は、たうとう、面前で、「物知り博士」（Mr. Know-All）と呼ばれるやうになつたが、それが皮肉であることには氣づかない。

「私はケラダ氏が嫌ひだつた」（I did not like Mr. Kelada.）といふ文を讀者は何度か讀まされるのだ。

モームが幾分喜劇的な調子で描いてゐるのは、決して惡人ではないが、他人に迷惑を掛けてばかりゐて、しかも自分としては他人につくしてゐるつもりの男であり、もつぱらさういふ意味での、人間の否定的な姿である。讀者はモームの他の多くの作品がさうであるやうに、ここでも、その調子とその姿が作の終りまで續き、何等かのスマートな幕切れを迎へるのだらうと思はせられるが、實際には、もう一人の人物が登場して話は意外な方向に展開する。

語り手とケラダ氏はいつも食卓で、一人の醫師とそれからラムゼーといふ若いアメリカ人夫妻と同席してゐたが、ラムゼー夫人の印象は次の通りだつた。

ラムゼー夫人は大層可愛氣のある人で、マナーはよく、ユーモアのセンスもあつた。領事館勤務は給料がよくないので、いつも隨分地味な服を着てゐたが、それを上手に着こなしてゐた。控へ目な中にも卓れてゐるといふ樣子を感じさせた。女なら誰でも持つてゐるのかも知れないが當今では彼女達の擧措に顯れてゐるとはいへない特質、そんな特質をラムゼー夫人が持合せてゐなければ私はこの人にことさらの注意を寄せはしなかつただらう。夫人を見てゐるとそのしとやかさに感嘆せずにはゐられなかつた。それは夫人の中で、上着に挿した一輪の花のやうに輝いてゐた。(4)

說明の順序は逆になつたかも知れないが、妻を一人でニューヨークに殘して神戸のアメリカ領事館に勤務してゐたラムゼー氏は、妻を日本に伴ふべく、急いで歸國したのだつた。

右の描寫は何となく我が森鷗外の歷史小說のヒロインの歐米における小型版のやうであるが、拙文の讀者の中には、ラムゼー夫人の肯定的な姿はケラダ氏における否定を際立たせるためのものであると考へる人もあるだらう。通常の小說作法からは、さう考へる方が自然なのであるが、ここには作者の巧妙なトリックが隱されてゐる。

或る日、夕食の席でケラダ氏とラムゼー氏は、日本人商人の手になる模造眞珠の話題から口論を始めた。激昂したケラダ氏は、眞珠の專門家である自分にはその眞贋はすぐにわかる、たとへばラムゼー夫人の首に掛つてゐる鎖の眞珠は一萬五千ドルから三萬ドルの高級品だと言ふ。そ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

れを聞いたラムゼー氏は冷笑して、これは妻がデパートから十八ドルで買つて來た安物だと言返す。そこで彼等は百ドルの賭をする。ラムゼー氏は澁る妻の首から鎖を外す。そして――

彼はケラダ氏に鎖を渡した。レヴァント人は懐から擴大鏡を出して、それを仔細に吟味した。その滑らかで淺黑い顏には勝利の微笑が擴がつた。鎖を返して、何か言はうとした。が、突然、彼はラムゼー夫人の顏の表情に目を止めたのである。夫人は顏面蒼白で今にも氣絶しさうに見えた。大きく見開かれた、脅えた眼で相手をじつと見詰めてゐる。その眼の中には必死の思ひの哀願があるではないか。それはあまりにも明らかだつたので、私には、夫のラムゼー氏が何故それに氣付かないのか不思議だつた。(5)

ケラダ氏は懸命の努力の果てに自分を抑へて負けを認め、ラムゼー氏から嘲笑される。このニュースはたちまち船内に傳はり、それまで肩で風を切つて船の中を歩いてゐたケラダ氏の面目は丸つぶれになつたのである。

翌朝、二人だけの船室でケラダ氏は、萬事を察した語り手に、「私に美人の妻がゐたら、神戸に駐在しながら妻をニューヨークで一年も過させるなんていふことはしませんよ」(If I had a pretty little wife I shouldn't let her spend a year in New York while I stayed at Kobe.) と言ふのだつた。

かう見て來ると、この小説は二重の構造を備へてゐることがわかるだらう。觸媒である語り手から、傍迷惑といふも愚かな否定的人物として呼出された男は、作の途中で、今度は自分が觸媒になつて、自分のそれを遙かに上回る否定の中に置かれた人物を呼出すのだ。少し氣取つた言ひ方をすれば、客體が主體に成り變つて他を客體化するといふ入組んだ圖柄がここにある。内容的に見ても、ケラダ氏は自分の名譽を犧牲にして他人を破滅から救ふ心の優しさを持合せてゐることが判明したのであり、これは第二の人物の不德が第一の人物の美德を明るみに出したのであると考へてもよい。小説『物知り博士』のストーリーはこのやうに、構造的にも、内容的にも、ひとところを低徊してはゐないのである。

作の終りでケラダ氏の否定面を强調する必要はもはやない。そこで作者は、彼をあれほど嫌つてゐた語り手に、「私はケラダ氏が多少好きになつた」(I did not entirely dislike Mr. Kelada.) と言はせる。絶妙な手法の下で書かれた小説といふべきだらう。

三　『メイヒュー』(Mayhew)

この作品では人間評價の針が負ではなく正を、すなはち肯定の方を常に指してゐる。それが一時的にもせよ否定の方向へ搖れ動くことは決してなく、主人公は作の終りまで――取りも直さずそれは「彼が死ぬまで」なのだが――明るい肯定の大道を歩いて行く。語り手がこの中年のアメリカ人の弱點を指摘する場合にも、それは彼の誇りに滿ちた歩き方をいささかといへども亂しはしないのだ。が、それでゐて、主人公の生を二分する或る生活上の事件に筆が及ぼされる時、そこには、モーム御得意の、そして人間の否定面を浮び上らせようとする時に最も威力を發揮するかに見えるところの人間矛盾論が感じられないことはないのである。

ここで語り手の在り方に目を向けておくことにしよう。前章の『物知

NII-Electronic Library Service

Meisei University

り博士』では語り手は語り手であると同時に作中人物でもある、或は（より適切な表現を求めるなら）語り手は作中人物を裝つてゐるのだが、人間の否定的な姿を描くためにはこのやり方の方が好都合なのであらうと思はれる。他の例を擧げると、『午餐』（The Luncheon）といふ作品は、パリで生活する貧乏文士に彼の愛讀者を自稱する女がつきまとつて彼を苦しめるといふ話であるが、その女の卑しさとさもしさを明るみに出す役割を果すものはこの二人の遣取りの外にない。

一方、目下取上げつつある『メイヒュー』では、語り手は文字通り「語る」ことに徹してゐて、彼が主人公と言葉を交す場面は唯の一箇所もなく、「私はメイヒューほど興味深い男には出會つたことがない」（I never met a more interesting man than Mayhew.）と書いてあつても、そのメイヒューといつ、何處で、どのやうにして出會つたのか、讀者にはわからない。またこの作品の中で固有名詞を與へられてゐるのはメイヒューだけであり、さうすると語り手以下すべての人々がメイヒューの、翳りのない生き方を協力して照し出す光景がここにはあるといふことになる。だからこの小説の登場人物は事實上一人だけであつて、それだけに彼は鮮明な輪郭を帶びてゐるので、多くの讀者が『物知り博士』よりは『メイヒュー』に惹かれるだらうと推察される。

デトロイトの有能な辯護士だつたメイヒューはすでに名聲と資産を手に入れ、彼が土地の名士になることは確實視されてゐたが、三十五歳の或る日、數人の仲間とクラブで酒を飲んでゐた時、最近イタリアから來たばかりの男よりカプリ島の或る家の話を聞かされ、それを買はうと言ふのだつた。「一體全體、カプリ島の家を買つてどうするんだ」「住むのさ」（"What in heaven's name would you do with a house in Capri?" "Live in it."）といふ會話を經て、メイヒューは電報を打ち、數時間後に、その家の持主になることが確定した。彼は輝かしい前途が約束されてゐる生活に見切りをつけて、カプリ島に移住した。

メイヒューの突發的な決心と行動は、彼自身認めたところによると、醉つてゐたからだと語り手は述べて、その後、しかしメイヒューは誠實な男であり、辯護士稼業に厭氣が差したのだと付加へてゐる。このあたりの書込みは少し不充分といふ氣もするが、作の冒頭では、作者が語り手と一體化して、いや、ことによると、語り出さうとする語り手に作者が「待つた」を掛けて、自らの人間觀を披歴してゐるので、それを見ることにしたい。

大抵の人の生涯は環境によつて決定される。人々は運命の手でその中へ放りこまれた境遇を諦めの氣持で受入れるばかりか、それを喜んで受入れさへもする。彼等はまるで、レールの上を滿足して走る電車のやうなものであり、輕快な自動車が往來を出入りし、廣々としたところを樂しげに飛ばすのを見ると、それを輕蔑するのである。私はかういふ人達を尊敬してゐる。（中略）しかし魅力は感じない。私が惹かれるのは、たしかに數は少ないけれど、人生を自分の手に取つて、それを自分の好みに合せて作り上げるかの如き人々なのである。[6]

世に背いて我が道を行く變り者にだけ人間的な興味を感じるといふわけであり、この箇所だけを取上げると、そこに人間の矛盾といふ要素は格別認められないが、メイヒューは三十五歳までは、「レールの上を滿足して走る電車」――この比喩はどう見ても拙劣である――だつたものを、突然、「輕快な自動車」に成り變つたのであつて、語り手もメイヒ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ューもその變貌を充分には説明し得ないのだから、やはりこの物語にはモームの人間矛盾論が影を落してゐると見なければならない。そしてそれは明らかに、人間の肯定面と否定面を、ではなく、相異なる二つの肯定面を連結するものだつた。

メイヒューがカプリ島に移つてからのことを敍する文は、モームが書いた最も美しい文の一つに數へられるのではないかと思はれる。

カプリ島にはローマ皇帝ティベリウスの謎めいた追憶が立ちこめてゐるといふ。メイヒューは歴史に目を開かれた。

> ナポリ灣に臨む幾つかの窓からは、ヴェスヴィアスの氣高い姿が光の變化に合せて色合ひを變化させてゐたが、ローマ人とギリシャ人への想ひに人を導く無數の土地が見えた。過去がメイヒューの意識をとらへ始めた。(7)

歴史家になつて、ローマ史の中ではほとんど知られてゐない紀元二世紀を手がけようとメイヒューが決意してからはもはや一本道である。メイヒューは萬卷の書を集めて、それを讀み始め、カプリ島の住人とのつきあひから少しづつ遠ざかり、寢食を忘れて研究に打ちこみ、頑健な肉體を徐々に病み衰へさせて行くが、そのどんな局面を取上げても、すでに述べた通り、そこには專らの人間肯定がある。モームは、「ここに人あり」と言つてゐるやうに見える。彼の作品に登場する諸々の否定的人物は、人間的リアリティにおいて、メイヒューと名告るこの畸人のそれに及ばないのである。

メイヒューは十四年間の辛苦の果てに――さうすると彼は五十に手の届く年齢に達してゐたことになる――準備を完了させ、つひに執筆の仕事に取掛つたその時、死んだ。

そして――

> 彼における知識の厖大な集積は永久に失はれた。自分の名をギボンやモムゼンの名に並べたいといふ、その、疑ひもなく立派な野心は空しかつた。彼についての記憶は少數の友人の胸中にしまはれてゐるが、嗚呼、年月の經過につれて、その友人達は更に少數になつて行く。そして彼は生前と同じく、死後も、世に知られてはゐないのである。(8)

私がこの小論の中へ持ちこんだ比喩は、闇の中を動いてゐる人物にしばし光が當てられ、然る後、その人物は闇の中へ戻つて行くといふそれであるが、それを當嵌めると、メイヒューといふ肯定的人物は眩いばかりの光を浴びたその後で、彼の場合には、死を背負つて、永遠の闇に沒するといふことになる。そしてどんな場合にも死は生に對比されなければならない。そこで語り手は――ここまで來ると、作者は、と書いてもよいのかも知れないが――メイヒューの人生は成功だつた、何故なら、彼は「目的の達成がもたらす苦々しさ」(the bitterness of an end achieved) をつひぞ知らなかつたからだと付加へるのである。

四　『サルヴァトーレ』(Salvatore)

「私にはそれが出來るだらうか」(I wonder if I can do it.) といふ思はせぶりな書出しで始まるこの小説の内容は、平凡といへばまことに平凡であり、讀者によつてはこれに何の興趣も感じないであらうが、私は

NII-Electronic Library Service

Meisei University

『コスモポリタンズ』の中ではこの作品が一番好きである。これの中には文學にとつての本質的な何かが單純な形で含まれてゐるやうな氣さへしてゐる。以下にその所以を明らかにしなければならない。

『サルヴァトーレ』の舞臺はナポリ灣に浮ぶ島であり、その點で前章の『メイヒュー』におけるカプリ島を想起させるが、その島の名は與へられてゐない。おそらく名を擧げるほどのこともない、渺たる小島なのであらう。

右に記した書出しの文章は次のやうな一文によつて受繼がれてゐる。

私がサルヴァトーレを初めて知つたのは、彼が十五歳の少年の時だつたが、その顏は愉快で醜く、口は朗らか、そして眼には憂ひがなかつた。(9)

ここでまたしても語り手の位置に注意することにしたい。語り手はサルヴァトーレを「知つた」とはいつても、彼との何等かの關係に置かれて、彼の人生行路に影響を及ぼすのではなく、終始、このイタリア人の生きる姿を見守るだけである。さうするとこの作品の語り手は『メイヒュー』の場合とまつたく同じ役割を果してゐると言はなければならない。すなはち彼は一つの純潔な生を導き出す觸媒として、ただそれだけとして、機能してゐるのだ。

貧しい漁師の息子だつたサルヴァトーレは、二人の弟の子守役たることを厭はない。このあたりの記述には、一頃の日本の貧家の少年を彷彿させるものがあるが、それはともかく、早熟な少年だつた彼はグランデマリナに住む氣位の高い美少女に激しく戀して、彼女と婚約した。しかし結婚は、兵役の義務を終らせないと出來ない。そこで彼はヴィットリオ・エマヌエレ國王の海軍に勤務する。住み慣れた島から離れての海軍生活は辛いことばかりで、彼はひどいホームシックにかかつたが、「中でも一番辛かつたのは、若い心の情熱を傾けて愛してゐる少女から離れてゐなければならないことだつた」(But it was hardest of all to be parted from the girl he loved with all his passionate young heart.)のである。

サルヴァトーレは最後に送りこまれた中國でリウマチに罹り、數箇月入院した後、除隊になる。その時、醫者から、全快することはないと言はれたが、上の空だつた。何故なら——

深く愛してゐる小島と、それから、自分を待つてゐてくれる少女のもとへ歸らうとしてゐる時に何を氣に懸けることがあらうか。(10)

ところが婚約者の態度は變つてゐた。一人前の男として働くことが出來ない病氣に罹つた人と結婚するわけには行かない、これは自分だけでなく家族全體の意向なのだ、と彼女は彼に言ひ放つ。サルヴァトーレは母親の胸に取縋つて泣いたが、彼のその後の心境は次のやうに敍されてゐる。

彼はひどく不幸だつたが、かの少女を非難したりはしなかつた。漁師の生活はきびしく、それのためには體力と持久力が要る。女が、自分を支へる力を持たないかも知れない男と結婚するわけには行かないことは、彼にはよくわかつてゐた。彼の微笑は大層悲しげであり、その眼は、打ちのめされた犬のやうな色を泛べてゐたが、愚痴一つこぼさず、あれほど愛してゐた少女の惡口を決して言はなか

NII-Electronic Library Service

Meisei University

つた。[11]

思ふにこの箇所は注目に價する。何となれば、ここには、人間の惡が、或はそれに近い何かが、きはめて發現しやすい狀況があるからである。作者にとつて――このことでは、語り手にとつて、とは言はない――サルヴァトーレの挫折をさういふ方向に發展させることはいともたやすかつただらうが、彼はそれをしてゐない。惡は蠢動すらしなかつた。サルヴァトーレに見られるのは、むしろ、東洋的とも言ひたいやうな、運命に從順な人間の姿である。

再び家業の手傳ひを始めたサルヴァトーレは、或る日、母親から、同じ村の若い女で彼より年上のアスンタが彼と一緒になりたがつてゐることを知らされる。彼はそれを聞いた時、「まるで鬼みたいな醜女(ぶす)だ」(She's as ugly as the devil.) と呟くが、結局、日本の見合ひに似たところのある儀式を經て、彼女との結婚を承諾した。

次に掲げるのは、彼等の新婚生活にかかはる描寫の一部である。

> アスンタはいかつい顏つきの女で、目鼻立ちには何の愛敬もなく、年よりは老けて見えた。しかし心情は優しく、それに、決して馬鹿ではなかつた。彼女の夫が主人顏をして、亭主關白を極めこみさうになつた時、彼女が夫に向けるささやかな獻身の微笑に、私は、いつも、喜びを感じたものである。彼女は夫の紳士的な優しさに絶えず心を動かされてゐた。しかし彼をしりぞけたあの少女を許すことは出來ず、サルヴァトーレが、ほほゑみながら、さういふことを言ふものではないと諫めたにもかかはらず、彼女は少女を罵つて止まなかつた。[12]

餘人は知らず、私には、これは珠玉のやうな一節に見える。「鬼みたいな醜女」として讀者に紹介されたアスンタは、今や、類稀な賢夫人として輝いてゐる。サルヴァトーレの善がアスンタの善を誘ひ出したことにならうが、この二つの善は補強し合つて、一つの理想的な生活の礎になることが豫想されるのである。

『サルヴァトーレ』において讀者の前に繰擴げられるのは、人間の能ふ限り肯定的な姿である。そして興味深いことに、モームの、すでに見た人間矛盾論は、この作品の何處にも入りこむ隙を見つけ出すことが出來ない。肯定の極致はそれの出番を奪つたといへよう。實際、サルヴァトーレとアスンタは、その言動において、いついかなる時にも矛盾してゐないし、サルヴァトーレを袖にした少女にしても、人性の自然に從つたまでのことだから、やはり矛盾してはゐない。彼女はもとより肯定的人物とは言へないが、だからといつて、人間の否定面を體現してゐるとも言へないのである。

妻との間に二人の男兒を設けたサルヴァトーレは、リウマチの發作に襲はれない限り、漁に勵んだり、葡萄畑で働いたりしたが、時々、海邊で子供達に水浴びをさせた。語り手は、彼が我が子を可愛がる樣子を描いた文の中で、彼の、羊の脚のやうに大きな手はまるで「花のやう」(like flowers) であり、「彼の笑ひは天使の笑ひを思はせた」(his laugh was like the laughter of an angel) と述べてゐる。明らかにこれは手放しの人間禮讃であり、人間讃歌である。サルヴァトーレは、作者の持論である人間性の矛盾から完全に解き放たれてゐる。その姿は、恰も、南イタリアの小島から望まれるイスキアやヴェスヴィアスの如くに美しい。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

その美しさの内容は、作者と語り手が一體化した趣きのある、次の、結びの文章において、熱つぽい調子で說かれてゐる。

私は最初に、私にはそれが出來るだらうかと述べたが、私の試みたことが何であるのか、今、說明しなければならない。誰にしろ、それ以上は到底望めないほど、それほど珍しく、貴重で、美しい特質、そんな特質以外には何一つ持合せてゐない一人の平凡なイタリア人漁師の肖像畫を數頁だけ描くその間、果して、讀者の注意力をつなぎ止められるかどうか、私はそれを知りたかつたのである。この男がどうしてその特質を、不思議にも、また、意外にも持合せてゐたのか、それは誰にもわからない。私にわかつてゐるのは、唯、この特質の發する輝きが、これほど無意識的な、これほど目立たないものでなければ、ほとんど耐へ難い俗人の方向に向つてゐただらうと思はれる、そんな輝きがあつたといふことだけである。それがどんな特質なのか、これでもわからなければ、言ふことにしよう。それは善良さである。まつたくのところ、善良さである。(13)

文學者は他ならぬ文學者であることの必然に促されて、人間における否定の諸相を求めながら、遍歷の旅をする。モームの『コスモポリタンズ』はその旅の報告書であり、だからこれは二十世紀のオデュッセイアである。しかし文學者がそのやうに否定を尋ねて歩くのは、否定それ自體のためにさうするのではなく、何處かに、すべての否定を吹つ切つた肯定のあることを信じてゐるからだらう。彼は否定の暗雲を突き拔けた彼方に肯定の青空を發見した時、人間の生命の、いと汚れなき源に觸れ得た喜びに我を忘れてひたるのではないか。よし、間もなく、それを後にして、再び遍歷の旅に出なければならない、としてもである。『サルヴァトーレ』は文學に備はる、そのやうな面を、僅か數頁の間に示してゐる作品のやうに思はれる。

註

底本はいわき明星大學所藏の次の本である。
COSMOPOLITANS VERY SHORT STORIES BY W. SOMERSET MAUGHAM (WILLIAM HEINEMANN LTD)

尙、この論文を書くに際して、私は、モームに關する文獻を一切參照しなかつたし、飜譯書も覗いてゐない。これはさうする方がよいと思つたからではなく、諸般の事情により、さうせざるを得なかつたのである。そのことに基く批判があれば甘受するしかないが、實は私自身、かういふやり方には限界を感じてゐる。英文の譯出において、誤譯や不適切な譯を防ぎようがないのである。さういふものがもしあれば、是非、指摘して頂きたい。但し、逐語譯ではないといふ批判を受けつける氣はないことを御斷わりしておく。また、譯文に原文を對照させるのは部分譯の場合にとどめた。獨立した引用文の原文は次に記す通りである。

(1) If you are a story-teller any curious person you meet has a way of suggesting a story, and incidents that to others will seem quite haphazard have a way of presenting themselves to you with the pattern your natural instinct has imposed on them. (PREFACE p. vii)
本文では前半部だけ譯出した。

(2) I am of a roving disposition; but I travel not to see imposing monuments, which indeed somewhat bore me, nor beautiful scenery, of which I soon tire; I travel to see men. (p. 38)

(3) Why novels and plays are so often untrue to life is because their authors, perhaps of necessity, make their characters all of a piece. They cannot afford to make them self-contradictory, for then they become incomprehensible, and yet self-contradictory is what most of us are. We are a haphazard bundle of inconsistent qualities. (p. 95)

(4) Mrs. Ramsay was a very pretty little thing, with pleasant manners and a

NII-Electronic Library Service

sense of humour. The Consular Service is ill paid, and she was dressed always very simply ; but she knew how to wear her clothes. She achieved an effect of quiet distinction. I should not have paid any particular attention to her but that she possessed a quality that may be common enough in women, but nowadays is not obvious in their demeanour. You could not look at her without being struck by her modesty. It shone in her like a flower on a coat. (p. 80)

(5) He handed the chain to Mr. Kelada. The Levantine took a magnifying glass from his pocket and closely examined it. A smile of triumph spread over his smooth and swarthy face. He handed back the chain. He was about to speak. Suddenly he caught sight of Mrs. Ramsay's face. It was so white that she looked as though she were about to faint. She was staring at him with wide and terrified eyes. They held a desperate appeal ; it was so clear that I wondered why her husband did not see it. (pp. 83-84)

(6) The lives of most men are determined by their environment. They accept the circumstances amid which fate has thrown them not only with resignation but even with good will. They are like street cars running contentedly on their rails and they despise the sprightly flivver that dashes in and out of the traffic and speeds so jauntily across the open country. I respect them ; they are good citizens, good husbands, and good fathers, and of course somebody has to pay the taxes ; but I do not find them exciting. I am fascinated by the men, few enough in all conscience, who take life in their own hands and seem to mould it to their own liking. (p. 8)

りの文の下線部の譯出は省略した。

(7) From his windows which overlooked the Bay of Naples, with the noble shape of Vesuvius changing in colour with the changing light, Mayhew saw a hundred places that recalled the Romans and the Greeks. The past began to haunt him. (p. 11)

(8) That vast accumulation of klowledge is lost for ever. Vain was that ambition, surely not an ignoble one, to set his name beside those of Gibbon and Mommsen. His memory is treasured in the hearts of a few friends, fewer, alas! as the years pass on, and to the world he is unknown in death as he was in life. (p. 13)

(9) I knew Salvatore first when he was a boy of fifteen with a pleasant, ugly face, a laughing mouth and care-free eyes. (p. 56)

(10) What did he care when he was going back to the little island he loved so well and the girl who was waiting for him? (p. 58)

(11) He was terribly unhappy, but he did not blame the girl. A fisherman's life is hard and it needs strengh and endurance. He knew very well that a girl could not afford to marry a man who might not be able to support her. His smile was very sad and his eyes had the look of a dog that has been beaten, but he did not complain, and he never said a hard word of the girl he had loved so well. (p. 60)

(12) Assunta was a grim-visaged female, with decided features, and she looked old for her years. But she had a good heart and she was no fool. I used to be amused by the little smile of devotion that she gave her husband when he was being very masculine and masterful ; she never ceased to be touched by his gentle sweetness. But she could not bear the girl who had thrown him over, and notwithstanding Salvatore's smiling expostulations she had nothing but harsh words for her. (pp. 61-62)

(13) I started by saying that I wondered if I could do it and now I must tell you what it is that I have tried to do. I wanted to see whether I could hold your attention for a few pages while I drew for you the portrait of a man, just an ordinary Italian fisherman who possessed nothing in the world except a quality which is the rarest, the most precious and the loveliest that anyone can have. Heaven only knows why he should so strangely and unexpectedly have possessed it. All I know is that it shone in him with a radiance that, if it had not been so unconscious and so humble, would have been to the common run of men hardly bearable. And in case you have not guessed what the quality was, I will tell you. Goodness, just goodness. (pp. 63-64)

Meisei University
NII-Electronic Library Service